

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	惟明親王の『正治初度百首』恋十首について：配列の視点から
Author(s)	北原, 沙友里
Citation	表現技術研究, 15 : 25 - 36
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49073
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049073
Right	
Relation	



惟明親王の『正治初度百首』恋十首について

―配列の視点から―

北原 沙友里

はじめに

百首歌をはじめとする定数歌は、内部構成を持つことや題詠性といった性格を有しているが、その構成は作品によって様々である。

とはいえ、基本的な構成は存在し、例えば、基本的な枠組みとして四季や恋などの部立があることや、四季部であれば時間的推移によって和歌が配列されていることなどが挙げられる。

時間的推移によって和歌が配列されるのは、四季部に限ったことではない。定数歌ではないが、最初の勅撰集である『古今和歌集』では、恋一から恋五までが恋の展開に沿った配列になっていることを、松田武夫氏⁽¹⁾をはじめとする先学諸氏が指摘されている。このような配列は、『古今和歌集』以後の勅撰集でも概ね踏襲されていく。

また、百首歌等の定数歌の恋部にも、同様の構成意識は窺える。例えば、組題百首の祖と言われている『堀河百首』の恋題を見てみると、「初恋」から始まり、以下「不被知人恋」、「不遇恋」、「初逢恋」、「後朝恋」、「会不逢恋」、「旅恋」、「思」、「片思」、「恨」となっている。浅田徹氏⁽²⁾の言葉を借りれば「恋の始まりから、会っ

てもらえない状況↓初めて会えたところ↓会った翌朝↓また会えなくなってしまうというような形で題が巡って行くのである。

『堀河百首』の構成は、その後の百首歌にも受け継がれていく。部立百首である『正治初度百首』もその例に漏れない。寺島恒世氏⁽³⁾は、後鳥羽院の『正治初度百首』を取り上げて、その構成を論じているが、恋部については次のように述べておられる。

院のこの十首一連を見ると、初恋から恨まで、伝統的な百首の歌題に倣っているが、逢恋・後朝恋・旅恋などはなく、待つ側から統一的に詠まれていることが指摘できる。しかも、その限定の上にも、忍ぶことから待つことへ、そして相手に忘れられ、過去の世界に生き、諦め、相手を忘れようとし、忘れられず恨めしく思うという恋の推移の緊密な関係が見られ、更に内省的な歌が多いことから、恋の主体は女性であると言えるのである。

後鳥羽院の百首歌は、「待つ側から統一的に詠まれている」と、女性側の立場に限定しつつも「忍ぶことから待つことへ、そして相手に忘れられ、過去の世界に生き、諦め、相手を忘れようとし、忘れず恨めしく思う」という恋の展開に沿った配列になっているのである。

このように『正治初度百首』でも、詠者の意識には、恋部を時間的推移に配列していくという基本的な枠組みがあったことが想像できる。本稿では、『正治初度百首』から、惟明親王の恋歌十首を取り上げ、考察を行うものである。まず、惟明親王の恋部全体を概観し、その構造を分析する。その上で、一七九・一八〇・一八一の三首について特に検討を行う。

一 惟明親王歌の恋部の構造

惟明親王の『正治初度百首』(4) 恋部一〇首は以下の通りである。

- ① いかにせんあふ坂山をふみまよひもとの恋路にかへるなげきを(一七四)
- ② 逢ふ事のむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり(一七五)
- ③ わが恋は神にいのれるひたち帯のむすぶかごとをたのむばかりぞ(一七六)
- ④ つれもなき君にもつらき人もがな思ひしりなば我をこふやと(一七七)
- ⑤ 逢ふ事はなだのしほ屋のあま人のからきは恋のこころなりけり(一七八)
- ⑥ あはぬ夜のさのみつもるをいかにせん枕のちりははらひてもねぬ(一七九)
- ⑦ 涙にはとふのすがごも朽ちはててあらばやななふ(5) あけて

待つべき(一八〇)

- ⑧ ひきかさねいつかうらなくあかすべきよるの衣を返し返して(一八一)

- ⑨ きぬぎぬの別れしほどもおもふよりかさねぬ袖もうちしをれけり(一八二)

- ⑩ あふ事は夢になりにし床の上になみだばかりぞうつつなりける(一八三)

各歌を見ていくと、①～⑤まではそれぞれ「あふ坂山をふみまよひ」・「逢ふ事のむなしき」・「ひたち帯のむすぶかごとをたのむばかり」(6)・「つれもなき君」・「逢ふ事はなだ」と、不逢恋の歌になつている。次の⑥・⑦は、「あはぬ夜のさのみつもる」・「とふのすがごも朽ちはて」と待恋が詠まれ、終盤の⑧～⑩は「ひきかさねいつかうらなくあかすべき」・「きぬぎぬの別れ」・「あふ事は夢になりにし床の上」と共寝を題材とした恋が展開していく配列となつている。

語句に着目してみると、第一に(あふ)という言葉を多用していることが挙げられる。直接言葉を詠み込んでいるものが、①「あふ坂山」・②「逢ふ事」・⑤「逢ふ事」・⑥「あはぬ夜」・⑩「あふ事」の5首、比喩表現を用いるなどして間接的に詠み込まれているものが③「ひたち帯のむすぶかごと」・⑦「とふ」・⑧「ひきかさね」・⑨「きぬぎぬの別れ」の四首となる。

第二に、衣や枕に寄せた歌が後半に集中していることが指摘できる。③「ひたち帯」のみ前半に置かれているが、以下⑥「枕のちり」、⑦「とふのすがごも」、⑧「ひきかさね」・「よるの衣を返し返して」、

⑨「きぬぎぬの別れ」・「かさねぬ袖」、⑩「床の上」と後半の五首はすべて衣や枕を題材に恋を詠んでいる。

このような特徴をまとめたのが次の表①である。表にまとめた通り、親王の恋部は題材や言葉、表現に偏りが見られるのである。

【表①:恋一〇首の構成】

歌順	歌番号	仮題*	「あふ」表現	衣表現	床表現
⑩	183	逢不逢恋	あふ事		床の上
⑨	182	逢不逢恋		きぬぎぬの別れ	
⑧	181	寄衣恋		ひきかさね	重ねぬ袖・きぬぎぬ
⑦	180	待つ恋		とふ	とふのすがこも
⑥	179	寄枕恋	あはぬ夜		枕
⑤	178	不逢恋	逢ふ事		
④	177	つれなき人			
③	176	不逢恋		ひたち帯のむすぶかごと	ひたち帯
②	175	不逢恋	逢ふ事		
①	174	不逢恋	あふ坂山		

*便宜上私に仮題を付けた

一方で、恋愛の展開に沿った構成という点ではどうだろうか。松田氏^⑧は、恋愛成就、すなわち恋愛の頂点を「相会ふ夜」だとする。つまり、初めて会う夜を境として恋愛成就以前・恋愛成就以後に分けているわけだが、この分類に従えば、惟明親王の恋部後半の配列には違和感がある。

待つ恋を詠んだ⑥・⑦の歌は、すでに男の訪れが途絶えた恋愛成就

以後の歌だと解釈できる。しかし、⑧番歌は「いつかうらなくあかすべき」や「夜の衣を返し返して」^⑧といった表現から、まだ逢瀬は果たされていない、恋愛成就以前の歌だと解釈できる。つまり、恋愛成就以後の歌の後に恋愛成就以前の歌が来てしまい、恋愛の展開に沿った構成とは言い難い。

このように、惟明親王の恋部は題材や表現に偏りが見られ、また、時間的推移に沿うという百首歌の基本的な配列からは逸脱しているように思われる箇所が存在する。ここに、惟明親王の何らかの工夫を読み取ることができないか、以下⑥・⑦・⑧の歌を取り上げ、詳しく検討していきたい。

二 一七九番歌 — 「枕の塵」を「はら」ふ表現 —

次に⑥歌を再掲する。

⑥ あはぬ夜のさのみつもるをいかにせん枕のちりははらひて
もねぬ(一七九)

先行研究ではこの歌をどのように解釈しているだろうか。『正治初度百首』は二〇一六年に注釈書^⑨が出版されているので、当該歌に付された訳注を次に引用する。

あなたに逢わぬ夜がこれほどに積もっていくのをどうしたらよいのだろう。たとえ枕に積もる塵は払おうとも、あなたとの共寝は叶わぬことよ。○積る―「塵」の縁語。○枕の塵―枕に塵が積もる程に恋人との共寝が久しく途絶えていること。○寝ぬ―「ぬ」

は打消の助動詞「ず」の連体形。恋人との共寝は実現されないということ。↓補注

補注▽「いつか我逢ひ見むことを今宵とて枕の塵をうち払ふべき」(言葉集・覚盛)のように、枕の塵を払う行為は恋人との逢瀬を期待するもの。しかし、枕の塵を払っても共寝を期待できない。それほどに逢瀬が途絶えているという。

右に掲げた通り、「あなたに逢わぬ夜がこれほどに積もっていくのをどうしたらよいのだろう。たとえ枕に積もる塵は払おうとも、あなたとの共寝は叶わぬことよ」という現代語訳を付し、「枕の塵」の注として「枕に塵が積もる程に恋人との共寝が久しく途絶えていること」としている。

この「枕の塵」という表現に着目してみると、『新編国歌大観』では『兼輔集』が初出となる。

かたがへにいきたるところに、まくらをかへすとて

しきたへのまくらにちりのみましかばたちながらにぞ人はとは

まし(七六)

かへし、女

君がためうちはらひつるしきたへのまくらのちりにけがれぬる

かな(七七)

その他の用例では、次に抜粋しているように、月と共に詠まれる例が散見される。

連夜に月をみるといふ心をよみ侍ける

しきたへのまくらのちりやつもるらん月のさかりはいこそねら

れね

(『後拾遺和歌集』卷第十五・雑一・八三八・源頼家朝臣)

(閨中月)

いたまよりもりくるつきはこひづまのまくらのちりのかずをみよとか

(『為忠家初度百首』・秋月廿首・四二七)

(月)

うちはらふ枕のちりもかくれなくあれたる宿をてらす月影

(『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』・十九番左・三七・大輔)

『為忠家初度百首』や『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』の例は「こ

ひづま」や「あれたる宿」といった表現から、恋愛成就以後の歌だと

推察できる。

同時代や近時代の用例に絞ってみると次のような例がある。

にぎり行くこちこそすれひとりぬるまくらのちりにつもる涙

は

(『月詣和歌集』卷第四恋上・三九五・三河内侍)

寄枕

いつかわれあひみむことをこよひとてまくらのちりをうちらはら

ふべき

(『言葉集和歌集』卷第十三・恋下・一九八・覚盛法師)

(右大臣家百首中、初逢恋五首)

あはれとも先見るばかり今夜我が枕の塵をしばしはらはし

(『林葉和歌集』卷第五・恋歌・七二六)

『月詣和歌集』や『林葉和歌集』は巻や題から、恋愛初期を詠んだ

歌であることがわかる。『言葉と歌集』歌は恋下の歌であるが、同歌集については、井上宗雄氏⁽¹⁰⁾が、

まず恋三巻であるが、巻十一恋上、巻十二恋中は連続しているようである。すなわち巻十一巻頭は「初恋心」で、大よそ恋の時間の推移に基づいて配列され、巻十二の終りの部分はさまざま恋の様相の歌が置かれ、題詠と、恋のいきさつを示す詞書のある歌とが共存している。巻十三は寄物恋で、「寄立春恋」以下、「寄無常恋」まで、ほぼ四季・雑題に寄する恋である。

と、その巻構成を指摘しているように、『言葉と歌集』巻十三は恋下ではあるものの、この巻は寄物型題の歌を集めた巻となっている。また、松野陽一氏⁽¹¹⁾も『言葉と歌集』の恋部の構成について「恋下部は、歌の内容こそ恋中に連続して、修復し得ない恋の結末の状況を六十八首全体として並べている」と述べているものの、脚注で「個別にはかならずしも全てが終末の状況とは限らない」と補足している。先に引用した『言葉と歌集』歌は、相手との逢瀬を期待する気持ちを詠んでおり、まさに「恋の終末とは限らない」歌だと言える。

以上のように、「枕の塵」という語は、恋愛成就以前の歌にも以後の歌にも用いられる。

ここで惟明歌に戻ると、「枕のちりははらひてもねぬ」と続いている。

「枕の塵」を「はら」ふという詞続きは、先に挙げた用例でいえば『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』歌、『言葉と歌集』歌と『言葉と歌集』歌が該当する。『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』歌は恋愛成就以後の歌であり、後の二首は逢瀬を期待して枕の塵を払うことを詠

んでいる。その他の例として特に注目したいのが『道助法親王家五十首』の次の歌である。

寄枕恋

何と又まくらのちりをはらふらんらびなき身のねやの秋かぜ

(『道助法親王家五十首』・九四八・右大将公経)

右の歌では、秋風はどうしてまた枕の塵を払っているのだろう、と詠んでいる。その疑問の理由は「ならばなき身」——共寝をする相手がいなかったためである。「秋かぜ」には当然「飽き」が掛かっているだろう。相手の訪れがなければ、共寝の枕に積もった塵を払う必要はないのである。

惟明親王の⑥歌も、下句の「枕のちりははらひてもねぬ」は、「たとえ枕に積もる塵は払おうとも、あなたとの共寝は叶わぬことよ」の意ではなく、(あなたの訪れがないので)枕の塵を払って(あなたと)寝ることもない、の意で理解するのが妥当ではないだろうか。

三 一八〇番歌 — 「とふのすがこも」と「塵を払う」表現 —

⑦ 涙にはとふのすがこも朽ちはててあらばやななふあけて待
つべき(一八〇)

この歌の和歌文学大系の訳注は次の通りである。

私の涙で幅広の十編の菅薦はすっかり朽ちてしまった。あなたが訪うてくれるという名のこの菅薦があるならば、あなたが寝る七編の分を空けて待つことができるのだが。本歌「陸奥の十編の菅

薦七編には君を寝させて三編に我寝む」(俊頼髓脳他)。○十編の菅薦―菅で編み目を十筋に編んだ筈・「編」は薦などの編み目。恋人の来訪の意の「訪ふ」を掛ける。○七編―菅薦の十編の編み目のうちの七編分。▽訪れの絶えた男を待つ女の歌。

この歌については、三句目から四句目に跨がっている「朽ち果ててあらばや」という表現について検討していく必要があると考える。この部分は、先の和歌文学大系の現代語訳では「すっかり朽ちてしまった。あなたが訪うてくれるという名のこの菅薦があるならば」と解釈されている。

「くてあらばや」という例は、惟明歌以前には見出せないが、後代の用例には二首見られる。『柳風和歌抄』歌と『拾藻鈔』歌である。

ききしらであらばやしはしこころから身にしむ風の秋にふくこゑ

(『柳風和歌抄』巻第三秋歌・六五・侍従為守女)

元弘のころ、藤原行房朝臣、隠州に下向し侍りしころ、たよりにつけて申しつかはし侍りし

おもひやるなみのたちゐのかなしきはよそにも袖をほすひまぞなき

返し

我が袖はなみのたちゐにくちはててあらばやいまはしをり(12)だにせむ

(『拾藻鈔』第八雑歌上・三六一・三六二)

『柳風和歌抄』歌では、初句から二句目にかけて「くてあらばや」となっており、「て」は打ち消しの接続助詞「で」、二句目の「ばや」

は終助詞となっている。

注目したいのは、『拾藻鈔』歌の方で、こちらは「朽ち果ててあらばや」という言葉続きもさることながら、三句目から四句目にまたがって置かれていることも、惟明歌と合致している。『拾藻鈔』は、鎌倉末期〜南北朝の歌人・公順の私家集で、この歌は、詞書から、元弘二年に後醍醐天皇の隠岐配流につき従う行房との贈答歌である。そのため、恋歌ではないものの、表現的にはおそらく惟明歌を踏まえて詠まれたものと推察される。『拾藻鈔』歌では、上句の意から「朽ち果てて」の「て」は完了の助動詞、「あらばや」の「ばや」は接続助詞十係助詞だと判断できる。『拾藻鈔』のこの歌も、惟明親王の歌も事実上の三句切れと言え、「くちはててあらばや」は、朽ち果てて(しまった。もし朽ち果てずに)あったならば、のように解釈するのが適当だろうか。

つまり惟明親王の⑦番歌は、「涙で十編の菅薦は朽ち果ててしまった、もしあったならば七編を空けて待つことができたろうか(朽ち果ててしまったので空けて待つことはできない)」と、三句目は言いさし表現、下句は疑問で解釈したい。

次に、「とふのすがごも」という表現を検討する。

この表現は『和泉式部統集』が初出となる。

ときどきくる人、昼あつう敷きておきたれといひたるに

たまさかにとふのすがごもかりにのみくればよどのにしく物も

なし

(『和泉式部統集』・二七五)

以降も多数の例があり、以下に抜粋する。

氷満池水八条にて

水とりのつらのまくらひまもなしむべきへけらしとふのすが

ごも

(『経信集』・一六五)

霜はらふ鴨のうは毛やいかならんとふのすがごもさゆるよなよ

(『堀河百首』・冬・霜・九二八・河内)

玉ざさにあられたばしる冬の夜はいとどぞさゆる十ふのすがご

も

(『堀河百首』・冬・霰・九二九・公実)

冬の夜はとふのすがごもさえさえて独ふせやぞいとどさびしき

(『久安百首』・冬・五四・公能)

(冬夜)

ひとりぬるとこにこほりはとぢねどもさえまさりけりとふのす

がごも

(『教長集』・冬歌・六二五)

田家冬夜の心をよめる

みちしばにしもやおくらんあづまやのとふのすがごもさえまさ

るなり (『成仲集』・五一)

特に冬歌として詠まれる例が散見され、それらの中には、公能歌や教長歌のように独り寝を詠み込んでいるものもある。しかしながら、この語の用例として圧倒的に多いのが、『俊頼髓脳』所収の

みちのくのどふのすがごもななふには君をねさせてみふに我ね

む(一二四)

を踏まえたもので、

君待つととふのすがごもみふにだに寝でのみあかす夜をぞ重ぬ

る (『久安百首』・恋・二七五・教長)

(雖契不来恋)

同

中中にたのめざりせばみちのくのどふのすがごも中にねなまし

(『和歌一字抄』・六四二・頭輔卿)

よもすがらまつこひ

きままつととふのすがごもみふにだにまだうちふさでこよひあ

かしつ

(『有房集』・三二七)

などは、その系譜に連なる例と言えるだろう。これらの歌は、語句(君待つと)や題(『雖契不来恋』・「よもすがらまつこひ」)から、いずれも待恋の歌であり、「とふのすがごも」という表現が、『俊頼髓脳』所収歌を契機として、待恋の句として確立していたことが推察されるのである。

一方で、同時代の傾向を見てみると、『師光集』や『千五百番歌合』の用例が見出せる。

さりともととふのすがごもあけて待つ七ふにちりのつもりぬる

かな (『師光集』・恋・六六)

左

まつひともとふのすがごもとはばこそななふをあけてぬともし
らせめ

左歌、みちのくのとふのすがごもななふには君をねさせてみ
ふにわれねん、と申す歌にてよまれたるが、上句にとふとよ
みて、下句ななふとよめる、やまひには侍らずや、とふのす
がごもとはばとそへられたるは、このこもならずとも、その
証はさだめてかんがへられてぞよまれて侍らん（以下略）

（『千五百番歌合』・恋二・千二百五十四番・二五〇六・小侍従）

左

いくかへりななふのちりをはらふらんまつよかさなるとふのす
がごも

左歌は、さきにも申し侍りつるとふのすがごもの歌に侍り、
上にななふのちりとおかれて、末にとふのすがごもと侍れ
ば、右歌、ことのほかのきず侍らずは、左歌まけ侍るべきに、
右歌、ことのほかにたちまさりてこそみえ侍れ

（『千五百番歌合』・恋三・千二百八十七番・二五七二・保季朝臣）

『千五百番歌合』の一・二五四番の歌は、上句に「とふ」下句に「な
なふ」と詠んでいる点が惟明親王の歌と似通っている。さらに、判詞
を見てみると、「上句にとふとよみて、下句ななふとよめる」ことが
「やまひ」ではないと判断されている。惟明歌でも、歌の病を回避し
ようという意志があつたかはさておき、少なくとも『俊頼髓脳』所収
歌以来の表現に工夫を凝らそうとする意識はあつたのではないかと
類推できる。

また、『師光集』歌では、上句に「とふのすがごも」、下句に「ち

りのつもりぬるかな」と詠まれ、『千五百番歌合』の一・二八七番歌で
も、上句に「ちりをはらふ」、下句に「とふのすがごも」と詠まれて
おり、正治年頃に「塵を払う」と「とふのすがごも」という表現が取
り合わされて詠まれていたことが想像できる。

そうすると、⑥・⑦の歌は一首ずつ独立して考えるのではなく、む
しろ一つの表現を二首に分けて詠み込まれていると見るべきではな
いだろうか。

四 一八一番歌 — 「うらな」と「夜の衣」表現 —

⑧ ひきかさねいつかうらなくあかさべきよるの衣を返し返し
て（一八一）

この歌の和歌文学大系の訳注は以下の通りである。

あなたと私は、衣を互いに重ね合わせて、いつか心に隔てなく夜
を明かすことができるのだろうか。その日を待ちわびて、夜の衣
を裏返しに着ることを何度も何度も繰り返しているのだけど。参
考「いとせめて恋しきときはむばたまの夜の衣を返してぞ着る」
（古今・恋二・小野小町）。○うらなく——心に隔てのないさま。

衣の「裏」を響かせる。↓補注。

補注○下句―夜着を裏返しに着て寝ること。恋しい人に夢で会う
ことを願う行為。結句は、そのような夜が何度も繰り返されるこ
とを表す。

和歌文学大系の訳注では、不逢恋の状態なのか、逢不逢恋の状態なのか不明瞭だが、続く一八二番歌の補注に「前歌から引き続いて、衣を重ねることを素材に取る。前歌では叶い得なかつた衣を重ねることと逢瀬は当該歌で果たされ、逢瀬の後になお恋人を慕い思う内容となる」とあるので、不逢恋の歌と解釈しているとみてよいだろう。

確かに「いつかうらなくあかすべき」という表現からは、まだ逢瀬は果たされていない、逢瀬を果たしたいという印象を受ける。また、「夜の衣を返し返して」の典拠である小町の「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」も『古今和歌集』の恋二の歌で恋愛成就以前を詠んだものである。

とはいえ、恋部の基本的な展開に則って考えるならば、部立の後半に不逢恋の歌が置かれていることには違和感がある。

ここで問題になると思われるのが、上句の「うらなくあかす」とはどのような状態なのか、ということである。現代語に直訳すれば和歌文学大系の訳通り「心に隔てなく夜を明かす」状態であろうが、これは初逢夜の状態なのか、すでに初めての逢瀬は果たされていてその上で心置きなく夜を明かす関係なのか、ということは検討する必要があるだろう。

「うらなくあかす」という表現は、管見の限り、当該歌のみであった。そこで下句の「よるの衣を返す」という表現が、恋愛成就以後の関係でも詠まれるのかを探った。

(恋)

あはぬ夜は返すといひし衣手を引きとめてだに恨かけばや

(『殷富門院大輔集』・六七)

(春恋)

三番 左持 有家

夢にだにみぬよなよなを恨みきて衣はるさめしをれてぞふる

左、ころも春雨しをれてぞふる、といへる詞よせおほくみえ侍り、右またかの、とくる氷のひまごと、といへる歌の心を恋にひきなして、涙うちいづる袖の春風、といへる、左はよせおほく、右はえんにみゆ、よりてなぞらへて持とすべし

(『水無瀬恋十五首歌合』・三番・五・有家)

『殷富門院大輔集』歌は、相手が「あはぬ夜は(衣を)返す」と「い」っており、詠歌主体はそのせめて「衣手を引きとめて」でも恨み言を言いたいと詠んでいる。歌意からも、恋愛成就以後の歌である。『水無瀬恋十五首歌合』歌は、衣を返すところ詠まれていないものの、上句の「夢にだにみぬ」、下句の「衣」という詞から、衣を裏返して寝ると恋しい相手を夢で見るという小町歌からの表現を踏まえた歌であることは明らかだろう。「夢にだにみぬ」相手とは当然現実でも逢瀬が途絶えていると考えられ、やはりこちらも恋愛成就以後の歌だと見なせるだろう。

このように、逢瀬が果たされた後も、夜の衣を返すという表現は用いられる。⑧歌は、初めての逢瀬を期待する歌というよりはすでに初めての逢瀬は果たされていてその上で心置きなく夜を明かす関係をお願い歌と解釈したい。

おわりに

惟明親王の『正治初度百首』恋部は、①～⑤が恋愛成就以前を、⑥～⑩が恋愛成就以後を詠んだ歌となっており、時間的推移に配列するという恋部の基本的な枠組みを親王も踏襲していたと言えよう。さらに細かく分けると、不逢恋を詠んだ歌群(①～⑤)・待恋を詠んだ歌群(⑥・⑦)・共寝を主題とした歌群(⑧～⑩)の大きく三つのままとりに分けることができる。前半五首はひたすらに逢うまでの苦しみを詠い、中盤の二首では同時代に取り合わされていた表現を配列という観点から利用しつつ待恋を詠んだ。終盤の三首では、共寝の歌を並べながら逢不逢恋の苦しみを詠んでいる。以上のことをまとめたのが次の表②である。

【表②: 恋一〇首の構成2】

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	歌順 歌番号	恋の成就	主題	「あふ」表現	衣表現	床表現
183	182	181	180	179	178	177	176	175	174						
以後					以前										
共寝			待恋		不逢恋										
あふ事		あはぬ夜			逢ふ事		逢ふ事		あふ坂山						
きぬぎぬの別れ・重ねぬ袖			とふ ひきかさね・よるの衣		とふ		むすぶかごと ひたち帯の								
床の上		がしも とふす 枕の塵													

このように歌群毎に歌の主題や歌材に統一が見られる一方で、後鳥羽院のように十首全体で恋の展開を構成している、あるいは男女どちらかの視点に立って統一させるという手法は見られない。

しかし、惟明親王の三つの歌群は漫然と並べられているわけではない。⑤から⑥へは「逢ふ事」・「あはぬ夜」と「あふ」という言葉で結び付き、また、「枕の塵」が同時代には不逢恋の歌でも多く詠まれていたこと⁽¹³⁾から、歌の主題においても連続性が見出せる。そして、⑥・⑦から⑧以降へは、衣や床に関連する表現によって結び付けられている。惟明親王の恋部の特徴とも言える同じ言葉や類似表現の多用は、各歌群を連結させる役割を果たしているのである。

また、このように言葉や表現により歌を連結していく手法は部立内に留まるものではない。『正治初度百首』では、恋の次に羈旅の歌が置かれているが、惟明親王の羈旅一首目を次に掲げる。

見せばやな磯の松風おとさえてかたしく袖もこほるなみだを(一八四)

傍線箇所「かたしく袖」はやはり独り寝を表わす表現であり、恋と羈旅の間にも表現上のつながり見出せ、このような点にも惟明親王の配列の工夫を読み取れるのである。

注

(1) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』(風間書房、一九六五年初版・一九八〇年再版)

松田氏は『古今和歌集』の恋部の構造を、恋愛成就以前(恋一・恋二)↓恋愛成就期(恋三)↓恋愛成就以後(恋四・恋五)の三つに分ける。

- (2) 浅田徹『百首歌 祈りと象徴』(臨川書店、一九九九年七月)
(3) 寺島恒世「正治二年初度百首」考―後鳥羽院の百首歌について(『国文学言語と文芸』八一号、一九七五年一〇月)

- (4) 『正治初度百首』の本文は宮内庁書陵部蔵本に拠り、本資料では便宜上、書陵部本を底本とする『新編国歌大観』(CD-ROM版 Ver.2)から引用した。和歌の冒頭には丸数字を付し部立内での位置を示した。また、それ以外の和歌についても『新編国歌大観』(CD-ROM版 Ver.2)に拠った。なお引用文中にあたって私に傍線等を付した。

- (5) 四句目について、『新編国歌大観』の翻刻本文では「ならぶ」となっているが、底本である宮内庁書陵部蔵本の本文は「なふ」であると判断し、私に「ななふ」と校訂している。

なお、田中洋己氏は、「三宮惟明親王の正治初度百首詠について」(『中世前期の歌書と歌人』和泉書院、二〇〇八年一月・初出『岡大國文論稿』三四号、二〇〇六年三月)の中で、「涙にはとふの菅菰朽ち果ててあらばやならふ空けて待つべき(恋一・一八〇)。この歌は『俊頼髓脳』所収の古歌「陸奥のとふの菅菰七ふには君を寝させて三ふに我寝む」を踏まえた作であって、第四句は「あらばやななふ」が本来の形であるかと思われる。」と『新編国歌大観』の翻刻本文について言及されている。

- (6) 「あづまぢのみちのはてなるひたちおびのかごとばかりもあひみてしかな」(『古今和歌六帖』第五・三三六〇)。『和歌文学大系49 正治二年院初度百首』(明治書院、二〇一六年)の注では本歌としてこの歌を引用している。

- (7) 松田氏は注(1)掲出書の中で、『古今和歌集』の恋部の構成について

巻第十三恋歌三全巻は、「会はずして帰る」歌群に始まり、無き名が立ち、それにもめげず通ひ、遂に「相逢ふ夜」を迎へて宿望を達成する。しかし、翌朝はきぬぎぬの思ひに泣き、人目をはばかつて「夢かうつゝか」の境地にさまよひ、相会ひながらも、浮き名の立つことを恐れる。さうした人知れぬ恋を、「衣に寄す」「夢路に通ふ」「人目つゝみ」「人に知られぬ」などの歌群により詳述する。秘めた夫婦関係の持続にも限度があり、自然、「色に出でぬべし」といった気持に転移する。さう思ふと、急に心の緊張が解け、浮き名は世情に一時に立つてしまふ。従つて、「会はずして帰る」以下「浮き名立つ」までの歌群の排列により、「相会ふ夜」を恋愛成就の頂点とし、その前後の様相を詳細に表現したものと見ることが出来る。

と論じておられる。

- (8) 「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」(『古今和歌集』巻第十二・恋二・五五四・小野小町)
(9) 『和歌文学大系49 正治二年院初度百首』(注(6)掲出書)。惟明親王歌の訳注は木下華子氏による。

(10) 井上宗雄「言葉集」雑感」(『和歌史研究会会報』一〇〇号、一九九二年一二月)

(11) 松野陽一「言葉集」の撰集方針―恋下部の寄物型題配列の意図―」(『千載集前後』笠間書院、二〇一二年五月・初出『和歌文学の伝統』有吉保編、門川書店、一九九七年八月)

(12) 歌意から「しほる」の意だと解釈した。

(13) ⑥・⑦の歌にはいずれも同時代歌の影響が看取されたが、田中洋己氏は、注(5)掲出書の中で、惟明親王の『正治初度百首』歌が、同時代あるいは近時代の歌人たちの詠歌から様々な表現を取り入れていることを指摘されている。本稿で取り上げた⑥・⑦歌では、一首の中に留まらず、配列に跨がって、同時代人たちの詠歌表現の取り入れが行われていた。他にもこのような例がある可能性があり、惟明親王歌の検討にはこの点にも注意を払っていく必要があるだろう。

(きたはら さゆり、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)